土産物にチョコ 試作

津山商高1年生 大学生と共同開発

津山

津山商高（津山市山北）の1年生が、国重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）の同市城東地区の土産物として市内外の大学生と共同開発を進めているチョコレートの試作品が完成した。12月7日に市中心部の商店街などで開かれる同高の大規模販売実習「津商モール」で試験販売し、商品化を目指す。（水島宏介）

津山商高の生徒（右）が大学生と共同開発したチョコレートの試作品

コーヒー豆ブレンド 板チョコと生チョコ 来月7日試験販売

板チョコと12粒入りの生チョコの2種類で「珈琲」の当て字を考えたとされる津山藩ゆかりの洋学者宇田川榕菴にちなみ、素材にコーヒー豆をブレンド。チョコの風味に加え、コーヒーの苦みと粉砕した豆の食感が楽しめるという。「津山珈琲」と名付け、パッケージはレトロ調のロゴをあしらった。

土産物開発は市内の歴史、文化資産を観光誘客に生かす「津山まちじゅう博物館構想」の一環で9月からスタート。1年生15人が美作大（同市北園町）、津山市を研究エリアとする山陽学園大（岡山市）と千葉商科大（千葉県市川市）の学生計15人と進めている。

生徒と学生は城東地区に美作地域の洋学者を顕彰する津山洋学資料館（津山市西新町）があることから、他に小物や通信アプリLINE（ライン）のスタンプを開発中。販売実習では、地区出身の箕作院甫らゆかりの洋学者の肖像写真をプリントした大小2種類のタオルも試験販売する。

価格は板チョコ400円、生チョコ500円で各100個の限定販売。同高1年中大翔さん(16)は「津山のPRにぴったりの商品になった」とし、山陽学園大3年向井柊さん(21)は「若者のアイデアが詰まった商品。市外の人にも手に取ってもらえるようになれば」と話している。